本文篇

第１章　研究の目的と概要

１．問題の所在と研究の目的

２．研究の組織・方法・経費

３．研究の経過

付１　陶磁関係用語の説明

付２　福建省の概要

研究の目的と概要

１．問題の所在と研究の目的

11世紀末～12世紀初頭、琉球列島に中国陶磁が初めて搬入され、これらが在地の土器に影響してこれまでの食器組成に変化がおきる。これらは滑石製石鍋やカムィヤキとよばれる徳之島産陶器とともに出土することが多く、また出土する陶磁器の組成が当時最大の貿易港であった博多とほぼ同じであることから、これらは博多や徳之島を経由して北からもたらされた品物とみられる。ところが13～14世紀、琉球列島の中国陶磁器の中に博多には希な種類の粗製磁器がみられるようになる。これが沖縄県で今帰仁タイプ白磁およびビロースクタイプ白磁と命名された２種類の磁器である。その後田中克子によって、これらの産地が中国福建省北部であること、14世紀後半に始まる進貢貿易以前に琉球と福建にダイレクトな関係が生じていた可能性のあることが指摘された。

当時日本には福建産の磁器が大量に搬入されていたのでこれ自体めずらしいことではないが、その２種類のみが他の磁器類とことなる分布をする点は、続く14世紀以降の琉球国と福建の密接な関係を考えると見逃せない。この２種類の動きを追うことで、琉球と福建の関係の始まりを解明できる可能性がある。また13世紀に大和との関係が衰退した後に琉球国が成立することへの理解にもつながる可能性がある。すなわち、今帰仁タイプ・ビロースクタイプ磁器を追究することで、琉球国成立前夜の琉球と中国との関係の一端を明らかにできると予測されるのである。

本研究はこうした研究状況を背景に、以下を目的とする。

１．今帰仁タイプおよびビロースクタイプ磁器を対象に、消費地においては所属時期を、生産地においては生産窯を特定して、これらの流通状況を具体的に把握する。

２．13～14世紀の琉球列島の背景をなす東アジアの歴史状況をあわせて検討する。

２．研究の組織・方法・経費

2.1. 組織

考古学班と文献学班で組織した。

共同研究メンバーは以下のとおりである。

研究代表者	木下尚子	熊本大学・文学部	〔考古学〕
研究分担者	伊藤正彦	熊本大学・文学部	〔中国史学〕
	小畑弘己	熊本大学・文学部	〔考古学〕
	大田由紀夫	鹿児島大学・法文学部	〔中国史学〕
研究協力者	田中克子	福岡市教育委員会	〔考古学〕
	新里亮人	伊仙町教育委員会	〔考古学〕
	宮城弘樹	今帰仁村教育委員会	〔考古学〕
	金武正紀	今帰仁村教育委員会	〔考古学〕
	栗　建安	福建博物院・文物考古研究所	〔考古学〕
	楼　建龍	福建博物院・文物考古研究所	〔考古学〕
	謝　必震	福建師範大学・中琉関係研究所	〔歴史学〕

楊　琮　福建博物院　〔考古学〕

2.2. 方法

○調査：それぞれ中国側と日本側からなる考古斑と文献斑を組織し、独立して調査を進めた。

考古斑

消費地と生産地の調査を中心に調査を行った。調査は基本的に全員で実施した。

複数の消費地と生産地の磁器片サンプルを、中国と日本でそれぞれ胎土分析をした。

・消費地：沖縄本島での調査：沖縄県埋蔵文化財センター・今帰仁村教育委員会
石垣島での調査：石垣市教育委員会・石垣市立八重山博物館
宮古島での調査：宮古市教育委員会　（金武正紀・新里亮人による）
博多での調査：福岡市埋蔵文化財センター・福岡市教育委員会
鷹島での調査：松浦市立鷹島埋蔵文化財センター・松浦市立鷹島民俗資料館
このほか東南アジア出土品について森本朝子が個人的に調査した

・生産地：連江県浦口窯の現地踏査・連江県博物館所蔵資料の調査
閩清義窯の現地踏査・閩清県博物館所蔵資料の調査

・胎土分析：中国科学院上海硅酸研究所での分析（今帰仁グスク・連江県浦口窯・閩清義窯）
福岡市埋蔵文化財センターでの分析（今帰仁グスク・博多遺跡群）

・その他：福建出土銭貨資料の収集：小畑弘己による
沖縄・九州出土中国陶磁器一覧の作成：新里亮人による

文献斑

・琉球にかんする文献収集：福建師範大学図書館・石垣市史編纂室

・日琉往来関係文献の調査：東京大学東洋文化研究所・石垣市立八重山博物館

・その他：名古屋大学

○研究会

・文献斑と考古斑の成果を年度ごとに発表し、意見交換を行った。

○成果発表

・成果発表会と講演会をそれぞれ１度ずつ公開形式でおこなった。

○報告書

・年度ごとに報告書を作製し、情報の共有をはかった。

2.3. 経費

本研究の直接経費は、以下のとおりである。

平成17年度	430万円
平成18年度	420万円
平成19年度	490万円
平成20年度	400万円
総　計	1740万円

3．研究の経過

2005年度

○　**研究会１**

と　き：2005年６月12日（日）
　　11：00～15：00

ところ：熊本大学文学部　第１・第２会議室

参加者：９名：伊藤正彦・小畑弘己・大田由紀夫・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・中村友昭・木下尚子

写真１　共同研究メンバーほか関係者
（福建博物院にて　2005.9.8.）

内　容：共同研究の目的・方法について説明。今後の具体的な進め方について意見交換する。

○　**打ち合わせ１**

と　き：2005年７月26日（月）９：30～12：00

ところ：福建省博物院　接待室

参加者：３名：栗建安・謝必震・木下尚子

内　容：共同研究の目的・方法について説明。今後の具体的な進め方について意見交換する。

○　**研究会２**

と　き：2005年８月７日（日）13：00～17：00

ところ：福岡市埋蔵文化財センター

出席者：７名：伊藤正彦・大田由紀夫・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

内　容：研究発表

・　田中克子「古代・中世後半の博多における福建産陶磁器輸入の動向」

・　大田由紀夫「シナ海交易・福建・琉球」

○　**打ち合わせ２**

と　き：2005年９月８日（木）９：00～12：00

ところ：福建博物院　会議室

出席者：16名

日本側７名：伊藤正彦・大田由紀夫・小畑弘己・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

中国側８名：楊琮（院長）・栗建安・楼建龍・梅花全（以下交流部主任）・林多（交流部秘書）・丁清華（以上福建博物院）・謝必震・孫清玲（以上福建師範大学）

内　容：福建における調査の実施、日本での調査計画について意見交換する。

写真２　福建博物院収蔵資料の調査
（福建博物院　2005.9.9.）

○　**調査１（文献班）**

と　き：2005年９月９日

ところ：福建師範大学附属図書館・福州市博物館

内　容：漢籍史料（地方志・族譜など）と福州史関連史料

の所蔵状況を調査、琉球関係史料に関して謝必震と意見交換（大田由紀夫）。

○　**調査２（文献班）**

と　き：2005年９月９日～11日

ところ：華東師範大学

参加者：伊藤正彦

内　容：「中国前近代の経済・社会と国家」中日共同研検討班に参加。「中国近世の社会的結合と国家」を報告（伊藤正彦）。

○　**調査３（考古班）**

と　き：2005年９月９日

ところ：福建博物院所蔵資料の調査

参加者：栗建安・楼建龍・小畑弘己・田中克子・森本朝子・宮城弘樹・木下尚子

内　容：連江浦口窯（浦口中学校・西山頂）・閩清義窯・閩侯鴻尾窯（前窯・后窯）・閩侯碗窯山・南平茶洋窯・連江定海出土の採集品を見、一部の図面をとる。遺物の選別・写真撮影（スライド）・実測を行う。

○　**調査４（考古班）**

と　き：2005年９月10日

ところ：連江県浦口窯での踏査

参加者：楼建龍・大田由紀夫・小畑弘己・田中克子・森本朝子・宮城弘樹・木下尚子

内　容：浦口窯を踏査し、連江県博物館（駱明勇館長）で遺物の記録（写真撮影）を行う。

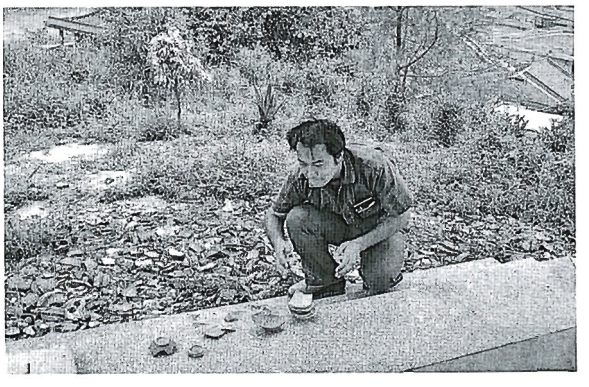


写真３　福建省での窯踏査
（連江浦口窯錦寺山　2005.9.10.）

○　**協議書の批准**

９月28日、熊本大学文学部長森正人による署名

10月９日、福建博物院長楊琮による署名

○　**打ち合わせ３**

と　き：2006年３月18日、19日

ところ：福建博物院

参加者：栗建安・楼建龍・謝必震・木下尚子

内　容：福建博物院側に依頼した来年度以降の窯跡調査の準備状況について確認。2006年度の計画を話し合う。

○　**2005年度の成果報告書作成**

2006年度

○　**研究会３**

と　き：2006年８月27日（日）13：00～17：00

ところ：福岡市埋蔵文化財センター

参加者：７名：伊藤正彦・大田由紀夫・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

内　容：

・　伊藤正彦「元末明初期の歴史像―中国役法史からの位置づけ―」

・　田中克子・森本朝子・宮城弘樹「博多遺跡群・今帰仁城出土の福建産粗製白磁についてのレポート―2006年６月におこなった栗建安氏をまじえた調査報告をかねて」

・　新里亮人による報告

○　**調査５（考古班）**

と　き：８月28日（月）

ところ：長崎県鷹島

参加者：６名：大田由紀夫・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

内　容：鷹島海底遺跡出土の福建産粗製白磁の閲覧（写真撮影と実測）

対　応：松浦市立鷹島埋蔵文化財センター　松尾昭子学芸員

松浦市教育委員会　松浦市立鷹島歴史民俗資料館　山下寿子学芸員

調査協力：小川光彦

○　**調査６（考古班）**

と　き：2006年５月30日（火）～６月４日（日）

ところ：沖縄、福岡

参加者：８名：栗建安・小畑弘己・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

内　容：

・　沖縄県立埋蔵文化財センター（西原町）で首里城二階殿出土遺物を調査

・　今帰仁城跡出土陶磁器資料調査で沖縄出土粗製白磁の産地について意見を交換する（研究会４）

・　沖縄県立博物館見学　（當真嗣一館長対応）

・　福岡市埋蔵文化財センターで博多遺跡群出土資料を調査

写真４　写真撮影

（福建博物院　2006.9.12.）

○　**調査７（文献班）**

と　き：2006年６月５日（月）～６月10日（日）

ところ：東京

参加者：４名：謝必震・伊藤正彦・渡辺美季（日本学術振興会特別研究員）・木下尚子

調　査：東京大学東洋文化研究所、名古屋大学で関連資料を調査する

○　**調査８（考古班）**

と　き：2006年９月10日（月）～９月19日（日）

ところ：中国福建省

参加者：11名：栗建安・謝必震・具志堅亮・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

写真５　明代の海防の城砦見学

（福建省恵安県崇武城　2006.9.14.）

調　査：

・　福建博物院保管の関係資料の写真撮影・実測をする。

・　閩清義窯踏査。ビロースクタイプの窯一つを確認する（９月13日）。

・　閩清義窯踏査時採集資料を整理・記録する。

・　福州市博物館・琉球館・琉球墓・恵安県崇武城を見学。

・　福建師範大学において博朗氏（福建師範大学社会歴史学院）に明代の城墻について講義を聴く。

通訳：陳碩眩氏（修士課程　琉球大学留学中）

○　**打ち合わせ４**

と　き：2007年２月５日（月）～２月７日（水）

ところ：沖縄県

参加者：３名：金武正紀・宮城弘樹・木下尚子

内　容：2008年度の調査と成果発表会開催に備え、関連資料を確認し以下の関連機関に協力を依頼する。石垣市教育委員会（下地傑・大濱永寛）・石垣市教育委員会収蔵庫（武元資料室・JA 資料室）・石垣市立八重山博物館見学（黒島為一館長・大濱憲二学芸員）・石垣市市編纂課（得能壽美主事・島袋綾野）・沖縄県立埋蔵文化財センター（田場清志所長・岸本義彦・金城亀信）

○　**胎土分析１**

中国科学院上海珪酸研究所に、福建省採集の磁器14点について胎土分析を依頼する。

○　**2006年度の調査成果報告書作成**

2007年度

○　**調査９**

と　き：2007年５月18日（金）

ところ：沖縄県立埋蔵文化財センター・浦添グスク・ようどれ館・首里城・壺屋焼物博物館

参加者：12名

栗建安・謝必震・楼建龍・伊藤正彦・大田由紀夫・小畑弘己・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

協力者：松川章（浦添市教育委員会）・幸喜厚（那覇市教育委員会）・倉成多郎（壺屋焼物博物館）

内　容：沖縄県出土の関連陶磁器を実見し、意見交換する。

写真６　光緒21年銘の羅針盤をみる
（石垣市立八重山博物館　2007.5.21.）

○　**研究成果の発表**

と　き：５月19日（土）

ところ：沖縄県立埋蔵文化財センター

参加者：12名

栗建安・謝必震・楼建龍・伊藤正彦・大田由紀夫・小畑弘己・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘

樹・森本朝子・木下尚子

協力者：名嘉政修（沖縄県埋蔵文化財センター長）・岸本義彦・上地博（以上沖縄県埋蔵文化財センター）・具志堅亮（今帰仁村教育委員会　当時）・陳碩眩（福建師範大学　琉球大学に留学中）

内　容：

栗建安「宋・元代における福建の貿易陶磁と研究の現状」

楼建龍「閩江中・下流域で生産された貿易陶磁―南宋・元・明代を対象に―」

謝必震　「文献資料からみた福建と琉球間の航海　」

大田由紀夫「宋元時代の『琉球』」

田中克子「沖縄出土の貿易陶磁の問題－福建産粗製白磁をめぐって－」

金武正紀「今帰仁タイプ白磁とビロースクタイプ白磁」

宮城弘樹「沖縄のグスクと集落の関係について」

新里亮人「九州、琉球列島における中国陶磁器の消費動向－11世紀～14世紀を中心として－」

発表は沖縄県埋蔵文化財センターの協力を得て公開講演会とし、一般から108名の参加者をえた。

○　**調査10**

と　き：５月20日（日）～22日（火）

ところ：石垣市教育委員会・石垣市史編集課・石垣市立八重山博物館など。

参加者：11名：栗建安・謝必震・楼建龍・大田由紀夫・小畑弘己・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

協力者：下地傑・大濱永寛（石垣市教育委員会）、得能壽美・島袋綾野（石垣市史編集課）、寄川和彦（石垣市立八重山博物館）長田依咲（通訳）

内　容：

・　下地傑氏の案内でフルスト原遺跡・桃里恩田遺跡・シタダル遺跡・唐人墓を見学。シタダル遺跡で中国陶磁器等を多く採集。

・　考古学班は石垣市立八重山博物館と石垣市教育委員会において福建産粗製白磁を熟覧し、記録をとる。文献班は石垣市史編集課・石垣市立八重山博物館で資料をみる。

写真７　ビロースクタイプⅠ・Ⅱ・Ⅲ類を確認！
（福建省閩清青窯隔　2007.9.6.）

○　**調査11**

と　き：９月２日～９日８日

ところ：福建省福州市・閩清県・泉州市

参加者：９名：栗建安・謝必震・大田由紀夫・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

協力者：駱明勇（連江県博物館館長）、林躍先（閩清県博物館館長）、林章生（閩清県義窯村書記）、栗潔・寥富魁・羊澤林（福建博物院）

内　容：

考古班：福建博物院保管の清窯窯隔の採集資料、連江県博物館所蔵の資料の実測・写真撮影。
連江浦口窯・閩清義窯井后崗・閩清青窯隔踏査ならびに資料の実測・写真撮影。

文献班：福州市内で調査。

福建師範大学で族譜・マイクロフィルムを見る。

泉州市で調査。

○　**胎土分析 2**

・　田中克子が福岡市埋蔵文化財センターと田上勇一郎の協力をえて、博多遺跡群ならびに今帰仁グスク出土の福建産粗製白磁42点を分析する。

・　中国科学院上海珪酸研究所に、福建省採集の磁器10点について胎土分析を依頼する。

○　**2007年度報告書を作成。**

写真 8　　研究会 5

（熊本大学文学部.　2008. 5. 17.）

2008年

○　**公開講演会**

と　き：2008年 5 月16日　18：00～20：00

ところ：熊本大学文学部　A2

参加者：９名：楊琮・栗建安・小畑弘己・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

協力者：熊本大学文学部考古学研究室

内　容：

楊　琮「福建省における漢代の閩越考古学―崇安漢城を中心に―」

栗建安「福建省の古代窯業―宋・元代を中心に―」

学生・学内教員・考古学関係者など32名の参加をえた。

○　**研究会 5**

と　き：2008年 5 月17日　９：00～16：00

ところ：熊本大学文学部　会議室

参加者：８名：栗建安・伊藤正彦・金武正紀・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・森本朝子・木下尚子

内　容：報告書の作成にむけて、編輯方針・執筆分担・内容の検討など。

○　**調査12**

と　き：2008年９月２日（火）～９月７日（土）

ところ：福建博物院文物考古研究所

参加者：５名：栗建安・新里亮人・田中克子・宮城弘樹・木下尚子

内　容：福建博物院に保管される昨年採集した資料について実測・写真撮影をおこなう。

○　**報告書（本書）作成**

写真 9　熊本大学五高記念館前にて

（2008. 5. 16.）

付１　陶磁関係用語の説明

１．陶磁器の部分名称について

陶磁器特有の部分名称について図１のＡ～Ｊ　に示す。Ｋは本書でよく使う特有の表現。

２．底部の整形について

・図１のＬ：高台を削り出した後、外底中心のヘソ状に突出した部分を再度雑に削る。ビロースクタイプによくみられる。

・図１のＭ：高台を削り出した後、外底周縁に沿って断面三角形の溝をきる。外底中心部分を再度広く削り取った結果溝状に残される場合と、外底周縁に沿って故意に溝状に削りを入れる場合の２通りがある。高台径の大きい今帰仁タイプによくみられる。

３．形状について

・腰折れ：高台脇から腰部にかけて水平に開き、腰部が「く」の字状に上方に屈曲する形状。

・鍔状口縁：口縁端部を外に向かって長く屈折させ、端部をやや上につまみ上げる形状。

４．陶磁器と窯具に関する名称・用語

天目（てんもく）碗：茶道における茶器の用語。鉄分の多い釉を使用した（黒釉・鉄釉）の喫茶用の碗。

灰被（はいかつぎ）天目：茶道における茶器の用語。天目茶碗の一種。釉が二重掛けされ、下に掛けられた釉が灰色を呈し、灰を被ったような趣を呈する。

匣鉢（さや）：焼成時、窯の中で灰が被ったり、破損したりすることを防ぐために器を入れた容器。

ハマ：焼成時、器の熔着を防ぐために高台の下に挟んだおもに円盤状の素焼きの窯具。

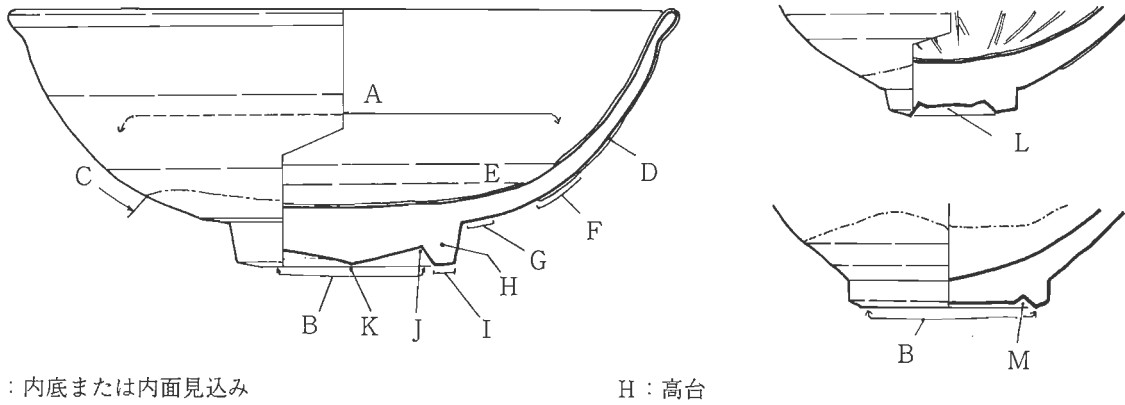
釉剥ぎ：釉を掛けたのち、一部分を掻取ること。輪形に掻取ったものを輪状釉剥ぎ・蛇の目釉剥ぎという。

印花文：彫刻された原体をスタンプすることにより施された文様。

蓮弁文：花弁状（蓮の花弁に似る）の文様。

細蓮弁文：蓮弁文に比べ花弁の幅が狭く、中には縦線のみで花弁状を呈しないものもある。

片切彫り文様：ヘラ状工具により施された彫り文様で、使用工具の具合で刻線の片側が深く、片側が浅くなり、文様に陰影が付いたように見える。　　（田中克子・木下尚子）



Ａ：内底または内面見込み
Ｂ：外底または高台見込み
Ｃ：施釉の範囲
Ｄ：釉のかかっている部分（釉層が極めて厚い場合のみ表現）
Ｅ：輪状釉剥ぎ
Ｆ：腰部
Ｇ：高台脇
Ｈ：高台
Ｉ：畳付
Ｊ：外底周縁部
Ｋ：外底中心部に突出した部分「ヘソ」
Ｌ：「ヘソ」を削ってできた狭い平坦面
Ｍ：外底周縁部に沿って一周する断面三角形の溝

図１　陶磁器の部分名称と底部の整形

付２　福建省の概要

１．地理

・位置と大きさ

福建省は中国東南沿海にある省で、東西480km、南北530km、面積12.14万 km²。

・地形の特徴

「東南山国」・「八山一水一田」といわれる山の多い地域で、山地が全体の53%、丘陵が29%を占める。西に武夷山が屏風のように連なり、中部に鷲峰山・戴雲山・博平嶺・玳瑁山などが聳え、これらに源を発する水系が東南沿岸に向かって流れている。なかでも閩江は福建最大の河川で、山々から541kmを流れ下って省内の２／３の地域を結びつけている。しかしその中流は流れが急で、開発が遅れた。下流の開発は早く進み、省都の福州市がある。閩江は福州の南台島をはさんで烏竜江と白竜江に別れ、福州西の馬尾で東中国海に注ぐ。

図２　福建省の位置

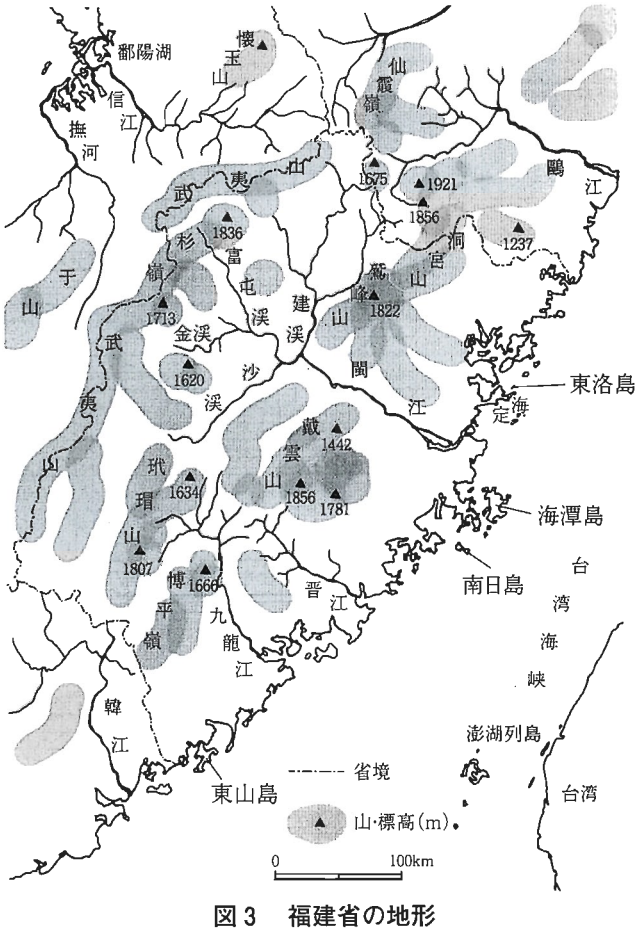


図３　福建省の地形

福建省は隣接する広東省・江西省・浙江省といずれも山を挟んで隣接し、大陸内部を背に、海にむかって開放された地域ということができる。

・行政単位

唐の開元21年（733）、福建経略使が設立されて以降、おもに独自の監察単位となり、唐末には威武軍、宋代には福建路、元代には福建道とよばれた。明代以降福建省となり、行政単位として現在に至る。

２．歴史

2.1. 概要（秦・漢代～アヘン戦争）

秦・漢代、閩中地域に閩越国が発展した。武夷山の漢城遺跡は前漢の高いレベルの文化がこの地に栄えたことを伝えている。しかし閩越人が北に移ると、福建地域は長い停滞期にはいる。呉・晋・宋・斉・梁・陳六朝期にわたり、閩の文化は曲折しながら緩慢に進展し、土着文化と

漢文化の融合が進んだ。

隋代に12420戸あった福建の人口は、盛唐期に10万戸をこえたとされる。しかし安史の乱（755～763年）後、中原の人々が大挙して福建に入植したため、福建の人口はさらに増加し、在地民と漢人の混血がいっそう進み、新たな福建人が生まれた。五代期には、福建の経済・文化が中原のレベルにまで高まり、その後の発展が準備された。

宋・元代、中国は同時代の世界でも経済・文化のもっとも発展した国として躍進するが、その牽引役を果たしたのが福建であった。 この時期は福建の経済・文化史の黄金期といえる。福建省の泉州港はエジプトのアレキサンドリア港とならぶ国際貿易港となった。宋代には福建出身の7000余名の朝廷の進士のうち50余人が宰相の地位にのぼった。『武経総要』を記した曽公亮・天文学の蘇頌・法医学の宋慈・植物学の蔡襄・哲学の朱熹などを輩出し、国際的な貢献を果たした。

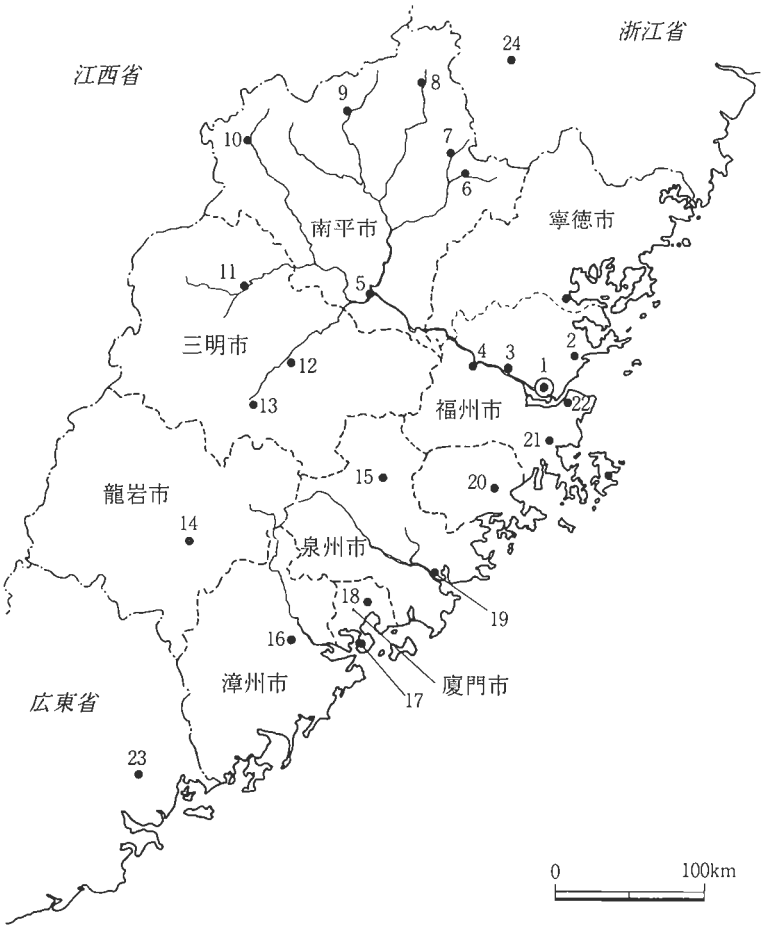


図4　本書にかかわる福建省の都市

1福州　2連江　3閩侯　4閩清　5南平　6政和　7松溪　8浦城　9武夷山　10光沢　11将楽　12三明　13永安　14龍岩　15徳化　16漳州　17厦門　18同安　19泉州　20莆田　21福清　22長楽　23潮州（広東省）　24龍泉（浙江省）

明・清代は、福建が海洋の世界史にまきこまれていく時代であった。1840年代以前の中国の国防は北方内陸地域を対象としていたが、この時期以降沿岸地域からの外国の侵略もその対象となっていく。福建は海辺の前哨として明初の海禁・鄭和の遠征・明中期以降の倭寇およびポルトガル人・スペイン人・オランダ人・イギリス人による相次ぐ通商と戦争に対応した。台湾海峡で発生する一切が中国全体に影響し、場合によっては諸外国の矛盾の焦点となった。南明が清朝に抵抗した40年に及ぶ戦いや鄭成功の台湾制圧は、中国海商の力の大きさをみせつけた。当時の福建は、茶・砂糖・絹織物を日本や東南アジアのヨーロッパ植民地に輸出し、大量の銀を輸入していた。国内に流入した銀は貨幣革命を引き起こし、宋元時代をはるかにしのぐ貨幣経済が発展した。

2.2. 特色

福建省は地理的な特徴によって周辺の内陸地域との交通が遮断されがちで、このために福建省の文化は強い地域色をもつ。その歴史的特徴は、以下のようにまとめられる。

① 新石器時代後期（5000年前）には独自の水稲文化が展開した。福州市西の曇石山遺跡を代表とす

る曇石山文化が著名。商文化も及ぶが影響は少なく、在地的な印文陶文化がさかえる。

② 在来の少数民族と、中原から断続的に南下した漢民族が混血して文化が融合し発展した。広東・台湾の漢人文化は福建の文化と密接にかかわっている。

③ 商品経済が発達した。南宋期の人口増加により食料不足がおこり、茶・砂糖・木材などを売って浙江・広東地域から食料を補った。またこのとき浙江の絹製品・江西の磁器を買い入れて海外に輸出したことが、沿岸地域の商品経済の発展の始まりとなった。

④ 宋代から清代に至るまで、福建は代表的な対外貿易地であった。東南アジア・日本への貨物はここから輸出された。この貿易は東南アジア地域の経済発展に大きな影響を及ぼした。

⑤ 宋代以降文化の先進地となった。第一回の科挙の合格者の数で多くの合格者をだし、宋代の李綱・朱熹・鄭樵・蘇頌・宋慈、明代の李贄・黄道周、近代の厳復・林紓・林語堂などを輩出した。

⑥ 明清代以降台湾海峡をめぐる攻防の第一線であった。兪大猷・鄭成功・林則徐らがこの地で登場したのはこうした背景と無関係ではない。

文献

徐晓望　主編　2006 『福建通史』第１巻　福建人民出版社（歴史の記述の多くは本書によっている。）

『福建省地図冊』中国地図出版社　2005年版

楼建龍　2007 「閩江中下游南宋元明外銷窯址研究」『中国福建の貿易陶磁と琉球―宋・元代を中心に―』第25回沖縄県埋蔵文化財センター文化講座　発表資料

行政単位については伊藤正彦氏に教示いただいた。また図面の作成には山野ケン陽次郎氏（熊本大学社会文化科学研究科修士課程２年）の協力を得た。記して感謝いたします。

（木下尚子）